

〔歴史学篇〕

【論文】

土器圧痕からみた熊本平野における 弥生時代開始期の穀物組成

小 畑 弘 己

Cereal composition in the Initial Yayoi Period in the Kumamoto Plain seen from the impressions on pottery

Hiroki OBATA

要旨 (Abstract)

There are various arguments about the timing of introduction of cereals (rice, barley, wheat, foxtail millet, common millet) cultivation from the Korean Peninsula into Japan. In the area of Kumamoto prefecture including the Kumamoto plain, there is a history that carburized rice which was already claimed in the Middle Jomon Period from the end of the 1940 's was discovered, and since then this region has been believed as an area where a rice farming might be done in the Jomon period. Although rice data at the initial stage of the Yayoi period was confirmed, the attention was focused only on rice, grasping as a complex of agricultural crops was out of the argument. This paper shows the result of the investigations of seeds or insects impressions carried out mainly on the protruding band earthenwares from the sites of the end of the Late Jomon Period to the Initial Yayoi Period in the Kumamoto Plain. Through these work, it was revealed that foxtail millet and common millet accompany with rice as cereal in these periods. This paper discusses the means of existence of these cereal compositions and the related issues.

キーワード (Keywords) : 穀物組成、弥生時代早期、熊本平野、土器圧痕

はじめに

イネをはじめとする大陸系穀物 (イネ・オオムギ・コムギ・アワ・キビ) の我が国への流入時期については、さまざまな議論がある。熊本平野を含む熊本県域では、1940年代末からすでに縄文時代中期と主張されるイネ粃が発見され、その後もこの地域は縄文時代後・晩期農耕論の舞台となってきたという経緯がある。また、弥生時代早期段階のイネ資料はもちろん確認されていたが、イネにのみ注目が集まり、農耕作物の複合体としての把握は議論の外に置かれていた。そこで、熊本平野の諸遺跡から出土した縄文時代晩期末もしくは弥生時代早期に編年される刻目突帯文土器を対象に土器圧痕調査を実施した。その結果、刻目突帯文土器期には、穀物としてイネにアワとキビが伴うことが明らかになった。本論は、この弥生時代早期段階の穀物圧痕を紹介し、本地域における縄文時代の稲作開始問題を含む、大陸系穀物の流入時期に関する問題点を整理・検討したものである。

I. 調査対象と調査の方法

1. 調査対象

今回調査の対象とした資料は、熊本市立博物館に所蔵されている上下江津湖出土品および上南部A遺跡出土品、吉原遺跡出土品、熊本市文化財課収蔵の山王遺跡、江津湖9次、扇田遺跡の出土品である。一部、突帯文期を遡る土器も調査しているが、おおむね刻目突帯文土器である。土器の点数は表1を参考とされたい。調査は小畑と原梓（当時：熊本大学大学院生）の2名で行った。

表1 圧痕調査の対象資料と調査概要

調査年月日	調査遺跡名	調査点数
2013年2月8・9日	吉原遺跡	1
	江津湖（苗代津Ⅱ）	360
	上南部A遺跡	506
2013年2月18・19日	山王遺跡	193
	江津湖9次（報告分）	263
2013年3月29日	江津湖9次（未報告分）	681
	扇田遺跡	190

<調査対象遺跡（資料）の概要>

(1) 扇田遺跡：熊本市貢町内

最終処分場建設に伴い1999～2000年にかけて15000㎡が発掘調査された。Ⅲ区・Ⅳ区を中心として、遺物包含層およびピットから突帯文土器が検出されている（熊本市教育委員会2004）。

(2) 上南部A遺跡：熊本市上南部町字荊野

1978年圃場整備に伴い発掘調査が実施されたが、牛蒡掘りにより大きく攪乱を受け、近世溝が確認されたのみで、明確な遺構や包含層は確認されていない。牛蒡掘りの掘り残し部分と道路下に二次堆積した縄文時代晩期末（弥生時代早期）の土器が発見されている（熊本市教育委員会1979）。本遺跡資料は突帯文土器の編年に引用されている（西1983・1985）。

(3) 山王遺跡：熊本市画図町大字重富字横塘

住宅建設に伴い2004～2007年にかけて10960㎡が発掘調査が実施された。弥生時代の自然流路から突帯文土器が検出されている。とくに流路2と流路5からはまとまった数の土器が検出されている（熊本市教育委員会2008）。

(4) 江津湖（下江津湖湖底遺跡）：熊本市水前寺下江津

熊本市立博物館所蔵資料である。昭和40年から平成2年までに江津湖で行われた浚渫工事の際に発見・採集された遺物群中の土器を対象とした（熊本市立博物館考古学同好会2006）。

(5) 江津湖遺跡第9次調査：熊本市水源1丁目

小学校のプール建設に伴い2004年に約1000㎡が発掘調査された。刻目突帯文期を中心とした土壌墓100基、土器棺墓6基（甕棺1基・壺棺5基）が検出された（熊本市教育委員会2005）。

(6) 吉原遺跡：熊本市吉原町

熊本市立博物館に所蔵されている表面採集品のうち刻目突帯文期の甕形土器を1点調査した。

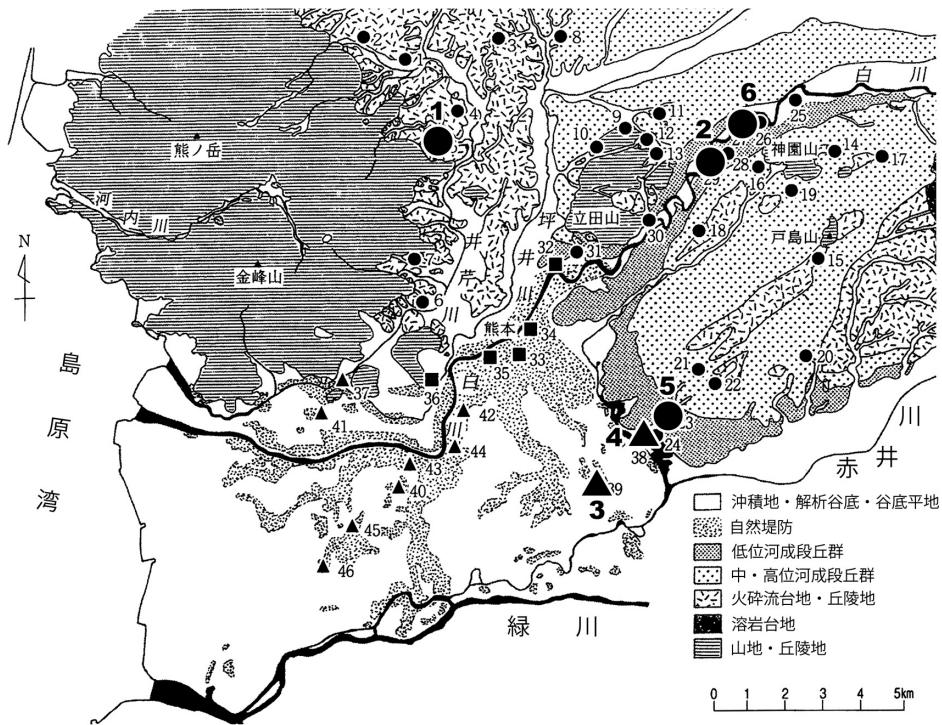


図1 本論所収遺跡と熊本平野周辺部の関連遺跡の位置図（金田2009を改変）

（地図中の遺跡番号は本文の番号と一致する）

2. 調査の方法

圧痕調査および調査後の作業手順は、以下のとおりである。なお、この手法は基本的に、印象材以外は、福岡市埋蔵文化財センター方式（比佐・片多2005）と同じものである。

- ① 土器を1点ずつ観察し、植物種実・昆虫・貝などの圧痕の可能性のあるものを肉眼と実体顕微鏡で抽出する。
- ② 圧痕部を水で洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。
- ③ 離型剤（パラロイドB-72 5%アセトン溶液）を圧痕部に塗布し、シリコンゴム：アグサジャパン株式会社製ブルーミックスソフトを圧痕部に充填する。
- ④ やや硬化したシリコンゴムをマウント（走査型電子顕微鏡用ピンタイプ試料台）に盛り、圧痕部と接合して硬化させる。
- ⑤ 硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。
- ⑥ 作製したレプリカを走査型電子顕微鏡（日本電子製JCM-5700型）で観察・撮影・同定する。
- ⑦ デジタルマイクロスコープ（KEYENCE VHX-2000）の2点間計測機能を用いて種実の長さ・幅・厚さを計測する。

Ⅱ．調査成果

1．検出圧痕（表2・図2－4）

検出した圧痕は29点で、すべてレプリカを作成した。レプリカの観察の結果、最終的に植物種実や昆虫と同定した資料は21点であり、内訳はイネ有籽果5点、イネ粉2点、アワ有籽果6点、キビ有籽果1点、イネ科種実（種不明）1点、ニワトコ核1点、コクゾウムシ1点、甲虫幼虫1点、不明種実1点、葉片1点、茎1点、ネズミ糞1点であった（図中b：土器、c：圧痕部顕微鏡写真、d：レプリカSEM画像、OGD：扇田遺跡、KNA：上南部A遺跡、SNO：山王遺跡、NSZ：苗代津Ⅱ、EZK：江津湖遺跡9次調査）。

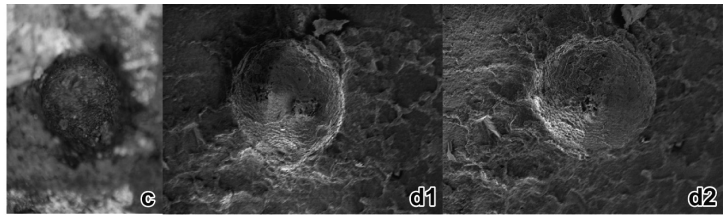
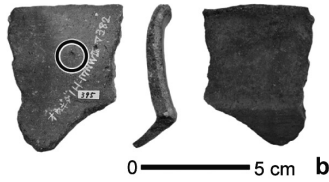
2．圧痕の時期別特徴

時期別にみると、夜白式土器以前の縄文時代後期後葉の御領式土器からはニワトコ核1点、御領式～天城式土器からは不明種実1点、型式不明であるが縄文時代後期後半と推定される深鉢形土器片からはネズミ糞1点、黒川式土器（新段階？）からはコクゾウムシ1点が検出され、突帯文土器以降の資料は茎・葉各1点ずつをふくむが、その他はすべてイネとアワ、キビなどの穀物の圧痕であった。その中でももっとも多量の圧痕が検出されたのは、江津湖遺跡第9次調査地点であり、イネを中心とした資料であった。イネは粉付果実（有籽果）もしくは粉そのものであり、EZK 0013の土器（1号甕棺下甕）は内面から3点のイネ有籽果圧痕が検出された。報告書には断面にもイネ粉痕が存在するとの記載があるため、接合部内部もしくは器壁内にもイネ果実の圧痕（炭化果実）が存在する可能性が高い。

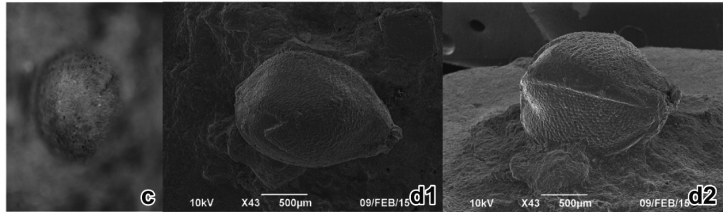
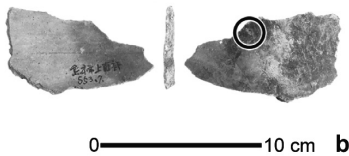
表2 検出圧痕の属性表

図	番号	遺跡名	資料番号	注 記	精粗	器形	型式／ 時期	部位	検出面	圧痕の 種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備 考
1	1	扇田	OGD 0001	オオギダ IH-17 NN II V 382	精	浅鉢	夜白 I	口縁部	内面	アワ有粋果	1.65	1.42	$0.86 + a$	報告書 IV区 図120-167
	2	上南部 A	KNA 0001		精	浅鉢	(夜白 I)	胴部	外面	アワ有粋果	1.62	1.44	1.17	
	3	上南部 A	KNA 0002		精	甕	(夜白 I)	胴部	外面	キビ有粋果	2.90	1.76	1.40	
	4	上南部 A	KNA 0003		精	甕	(夜白 I)	胴部	内面	アワ有粋果	1.81	1.19	$0.97 + a$	
	5	山王	SNO 0001	4-98 流路 2	精	小壺	夜白 I・IIa	頸部	内面	アワ有粋果	1.76	$1.29 + a$	0.92	
	6	苗代津 II	NSZ 0001	吉田雅人コレクション	精	浅鉢	晩期前半	口唇部	外面	コクゾウムシ	$3.63 + a$	1.17	$0.84 + a$	下江津 中の島東側
	7	江津湖 9 次	EZK 0001		精	小壺	夜白 I	肩部	外面	イネ有粋果	5.41	3.46	2.40	報告書86
2	8	江津湖 9 次	EZK 0002-1	52号土坑小壺	精	小壺	夜白 I	口唇部	外面	イネ粉	—	—	—	報告書65
	9	江津湖 9 次	EZK 0002-2					底部	外面	アワ有粋果	1.68	1.55	1.27	
	10	江津湖 9 次	EZK 0003	42号土墳墓	精	小壺	夜白 I	肩部	外面	葉	$6.98 + a$	$4.44 + a$	1.42	報告書59
	11	江津湖 9 次	EZK 0005	17土 19土326	精	浅鉢	夜白 I	坏部	内面	イネ有粋果	5.46	3.51	2.23	報告書34
	12	江津湖 9 次	EZK 0006	17土 上277	精	浅鉢	夜白 I	底部	外面	イネ粉	—	—	—	報告書27
	13	江津湖 9 次	EZK 0007	D/E 2-3 カクラン	精	小壺	夜白 I	口縁部	内面	茎?	$3.25 + a$	$2.23 + a$	$2.34 + a$	報告書176
	14	江津湖 9 次	EZK 0010	1 住下位38	精	深鉢	御領式	口縁部	外面	ニワトコ核	2.81	1.51	0.85	報告書100
3	15	江津湖 9 次	EZK 0011	F-5 IV下129	精	深鉢	御領式～ 天城式	口縁部	内面	不明種実	1.43	1.23	0.95	報告書217
	16	江津湖 9 次	EZK 0012	D/E 2-3 カクラン-424	精	壺	夜白 I	底部	断面	甲虫目幼虫	$6.10 + a$	1.46	0.87	
	17	江津湖 9 次	EZK 0013-1	1 号カメカン	精	甕	夜白 I	胴部	内面	イネ有粋果	6.23	3.53	$1.94 + a$	報告第8図下甕
	18	江津湖 9 次	EZK 0013-2					胴部	内面	イネ有粋果	$6.15 + a$	$3.51 + a$	2.29	
	19	江津湖 9 次	EZK 0013-3					胴部	内面	イネ有粋果	5.41	3.37	$2.06 + a$	
	20	江津湖 9 次	EZK 0014	2 号カメカン133	精	甕	夜白 I	胴部	内面	イネ科種子	3.31	1.18	0.90	
	21	江津湖 9 次	EZK 0015-1	67号土坑内 300	精	深鉢	縄文後期後半 (?)	胴部	内面	ネズミ糞	4.48	1.98	$1.74 + a$	

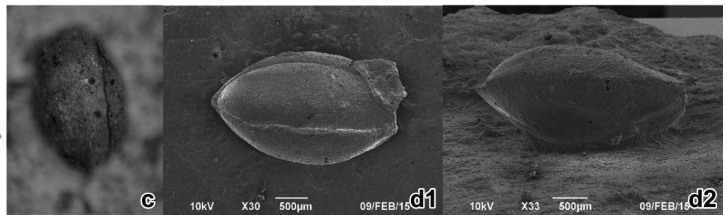
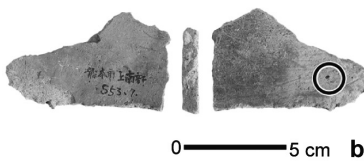
1. OGD 0001



2. KNA 0001



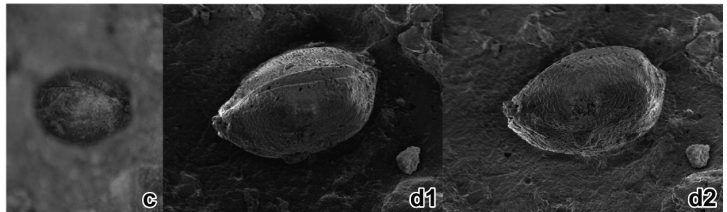
3. KNA 0002



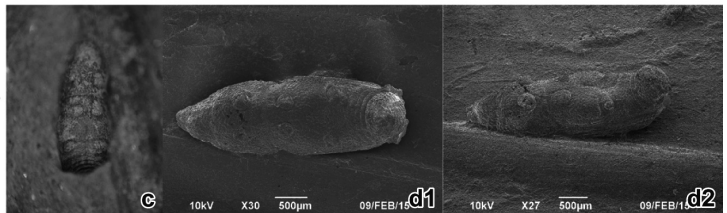
4. KNA 0003



5. SNO 0001



6. NSZ 0001



7. EZK 0001

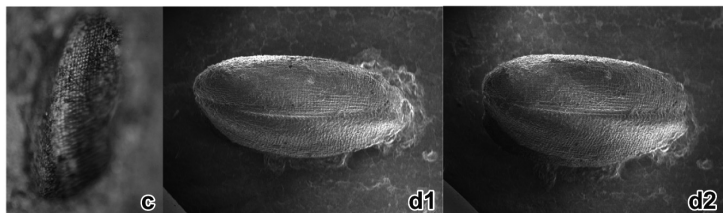
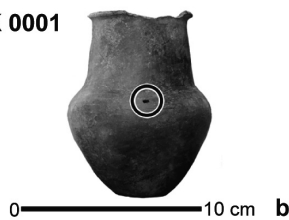


図2 本論所収遺跡出土土器圧痕・レプリカSEM画像1

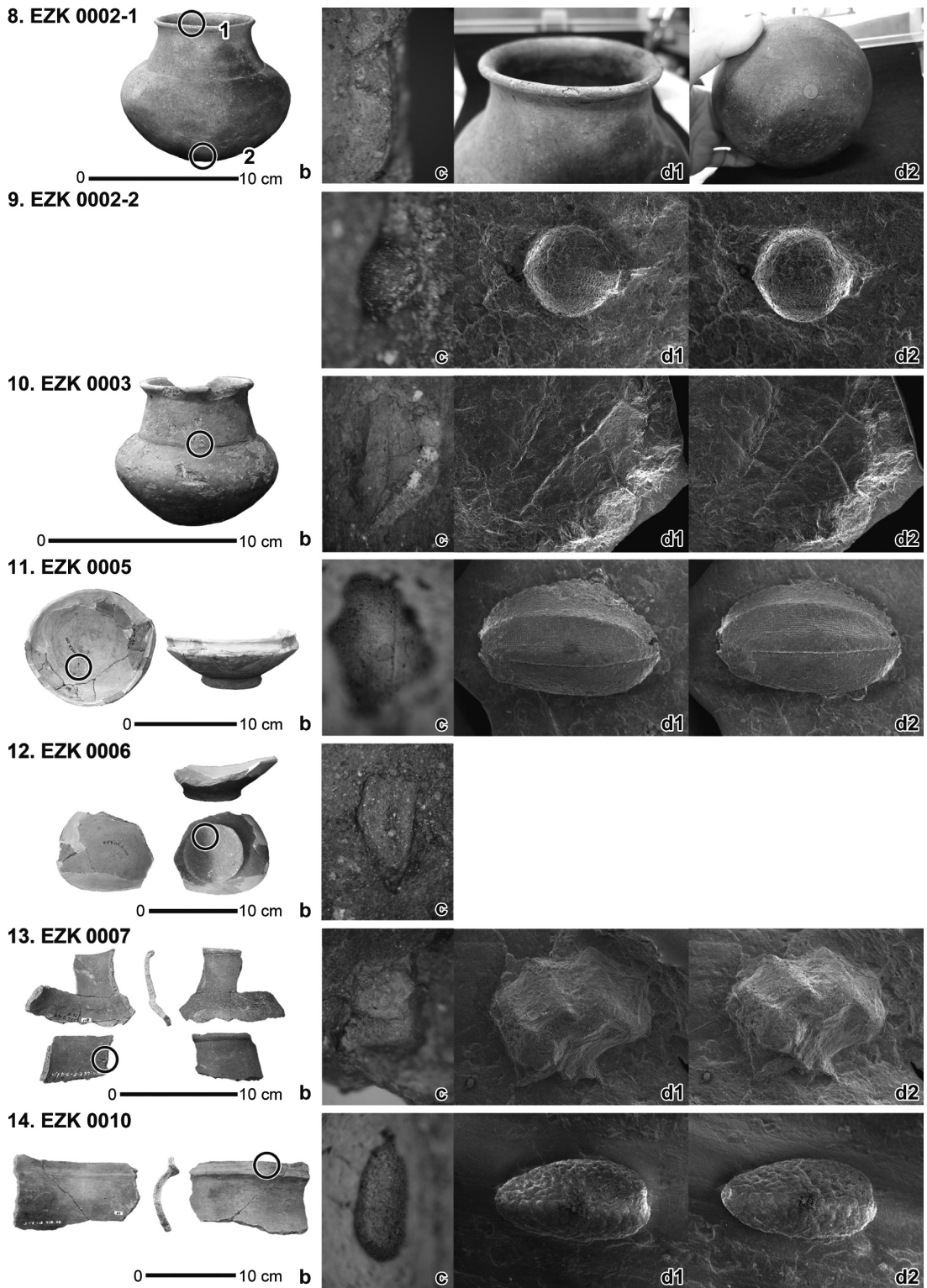
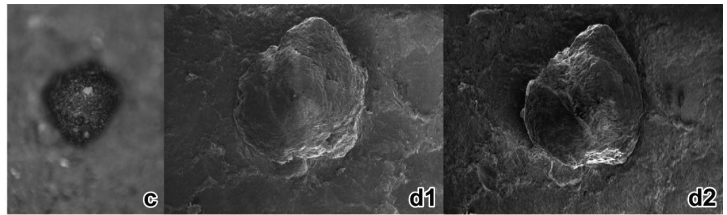
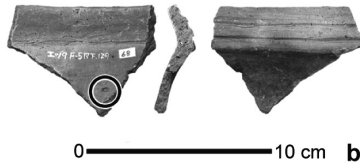
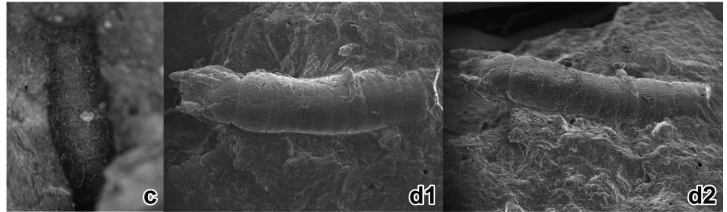
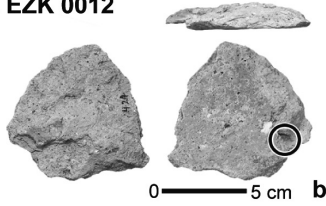


図3 本論所収遺跡出土土器圧痕・レプリカSEM画像2

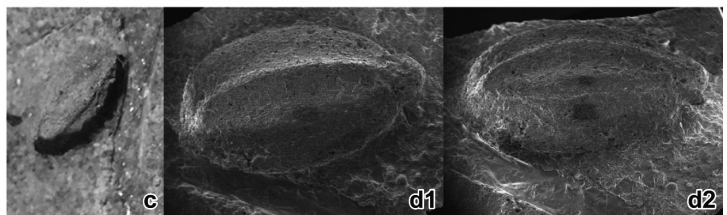
15. EZK 0011



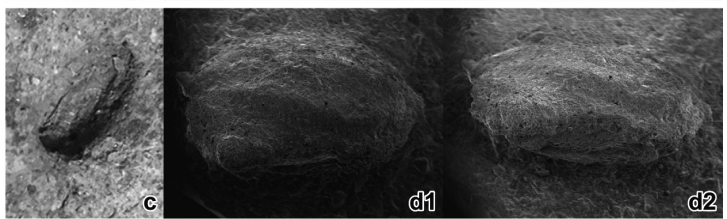
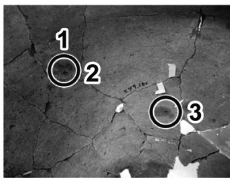
16. EZK 0012



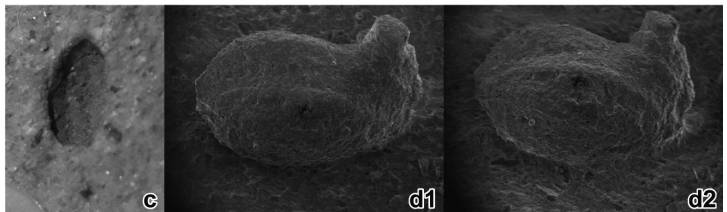
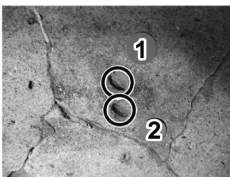
17. EZK 0013-1



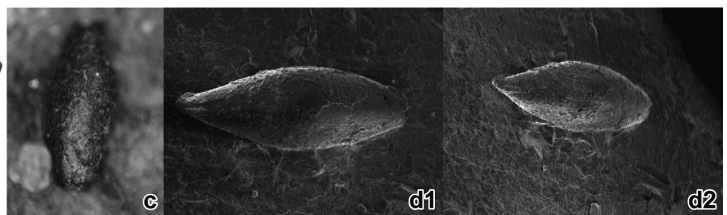
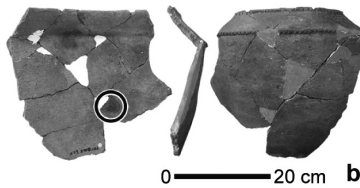
18. EZK 0013-2



19. EZK 0013-3



20. EZK 0014



21. EZK 0015-1

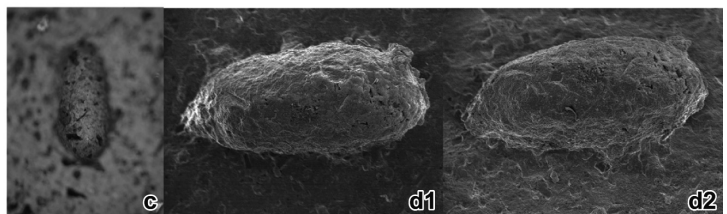
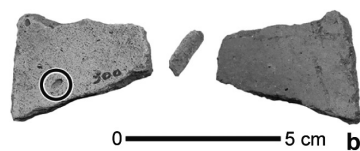


図4 本論所収遺跡出土土器圧痕・レプリカSEM画像3

Ⅲ. 考 察

1. 既存研究によるイネ資料の評価と本資料の意義づけ

本地域を含む熊本県内における考古遺跡から出土する穀物資料については、古くから古閑原貝塚出土のイネ（縄文時代中期）、ワクド石遺跡のイネ（川上1958）、健軍上野原遺跡のイネ・オオムギ（小谷1972）などの炭化・未炭化穀物資料が注目され、縄文時代に遡るとされると主張されてきた。これらについては、年代測定が実施されておらず、縄文時代のものであるかの科学的検証は今も行われていない。

古閑原貝塚は玉名市岱明町に所在する貝塚遺跡で、水田用の溜池掘削を契機に1948年春に発見され、阿高式土器を中心とする貝塚および泥炭層を持つ遺跡と判断された。発掘調査は同年6月～7月に実施された（熊本県教育委員会1952）。イネ粃は、阿高式土器を含む貝層の上下の粘土層から検出されているが、上部の黒色有機質粘土層には弥生時代の遺物を含みそれとともに多数のイネ粃が検出されている。貝層下部の白色無機質粘土層ではその上部10～20cmに貝層中の遺物が食い込んでいる状態である。この白色粘土層は北部九州一帯の基盤層である阿蘇4火山灰噴火時の火砕流：八女粘土層である可能性が高い。そうであればイネ粃は上部貝層からの食い込んだ遺物に由来すべきである。ここで想定されるのは黒色有機質粘土層中の弥生時代のイネ粃が紛れ込んだ可能性である。報告者はこの点にも留意しており、十分に土層および貝層の堆積状況を吟味し、その可能性のないこと、イネ粃の所属時期は、阿高式土器の時期の貝層の形成期およびその直後と主張する。しかし、阿高式土器期の貝層中からはイネ粃の検出はない。通常の遺跡においても土層の堆積状況の確認は難しく、ましてや貝層を含み、水の湧く状況での土層からの遺構の掘り込みや生物攪乱を識別するのはきわめて困難である。コムギの出土も報告されており、コムギは韓国においては無文土器時代以降であり、わが国においても弥生時代前期末以降の例が最古であるという現在の発掘資料の出土傾向からみて、やはり、弥生時代以降の所作の可能性がきわめて高い。

最近の調査によって、熊本市石の本遺跡では、縄文時代後期末の竪穴住居址から炭化イネが検出されているが、オオムギやスイカの種子とともに出土数が少ない上に、採取された土壌の堆積の不安定さが指摘されている。これに対し、カラスザンショウ果実やササゲ属（アズキ亜属）種子は覆土下層中から多量に出土するという対照的な出土状況を示している（熊本県教育委員会2002）。以上のような状況を考えると、健軍上ノ原遺跡出土のイネやオオムギ資料についても、同様の後代のコンタミネーションである可能性が高く、推定された時代の信憑性は低いものと考えられる。

圧痕としては、1950年代より菊池市ワクド石遺跡から縄文時代後期後葉の土器からイネと目される圧痕が2点報告されていたが、中沢道彦・丑野毅らによるレプリカ法による調査によってこれらがイネでないこと、1点は種不明の種子である可能性が指摘された（中沢・丑野2005）。この種不明の種子は後にダイズ属の臍部分であることが判明した（小畑ほか2007）。

また、ほぼ同じ頃、山崎純男は熊本県下の縄文土器の圧痕調査を精力的に行い、縄文時代中期末のイネ（玄米）圧痕を初めとして、後期中葉～後葉のイネ圧痕資料（粃・有稈果）を多数検出した（山崎2005）。これは山崎も主張するように、縄文時代の中期末～後期にかけてのイネの渡来を証明するものとして、注目を集めた（宮本2005・2009、小畑2008）が、土器圧痕調査の進展と既存資料の洗い直しによれば、これら圧痕資料に関しては、植物学的・考古学的両面から信頼のおける資料とは言え

ないことが判明した（小畑2015）。また、表3にみるように、南九州～中西部九州に分布する黒川式土器の新しい段階と考えられている干河原段階にもイネ圧痕が認められるが、これら土器の北部九州との年代的な並行関係は少なくとも出現期突帯文土器もしくは夜臼Ⅰ式段階（宮地編年Ⅰ・Ⅱa期）と同じと評価された。

以上のような状況からみると、現状で確実なイネ資料は突帯文土器以降であり、今後は突帯文出現期（宮地Ⅰ期）まで遡るか否かが今後の焦点となる。ただし、このような段階が九州地域全体に存在した可能性は低い。熊本平野の該期の遺跡の動向からも、きわめて少ないといえる（金田2005）。今回の圧痕調査では、突帯文期土器を中心に調査したためそれより古い段階の土器を十分に調査したわけではないため、これで言えるかどうかかわからないが、はからずも縄文時代後期末までの土器にはイネやアワなどの大陸系穀物は1点も含まれておらず、コクゾウムシなど、黒川式土器中段階までの九州の縄文時代を代表する圧痕組成（小畑2015）とほぼ同じであることを再確認した。そして、ますます突帯文土器期の穀物資料の多さが際立つ結果となった。

2. 穀物組成

今回、既存の炭化穀物資料に、刻目突帯文期（山ノ寺・夜臼Ⅰ期）のイネとアワを追加できたことは、大きな成果であるとともに、さらにキビの発見を検出できたことは重要である。これら雑穀類の存在は北部九州での山ノ寺式・夜臼式段階の炭化物や圧痕の検出例から類推できたが、本地域での実際の確実な出土例は初めてであり、貴重な資料と考えられる。出土遺跡や種同定に関しては、以前予察的な見解（小畑2016）を示したが、今回の再度の検討により、本論のとおり修正しておく。

上南部A遺跡の土器からはアワとキビが検出されている。それらは胴部破片であり、粗製の土器も含まれる。時期比定が難しいが、本遺跡から出土している主体の土器は刻目突帯文土器であり、その中でも古い様相をもつものが主体であると推定されている（西1983・1985、金田2009）。福岡市橋本一丁田遺跡出土の山ノ寺・夜臼Ⅰ式段階の土器からはキビ圧痕が検出されており（小畑2015）、上南部A遺跡例もこの段階のキビ資料である可能性がきわめて高い。これに対して江津湖遺跡第9次調査資料は山ノ寺式土器段階を含みながらも夜臼Ⅱb期段階の土器も含まれている。当該期の遺跡の立地を検討した金田（2009）はこの山ノ寺式（上南部式）段階までの遺跡が主に丘陵や扇状地上に立地する小規模遺跡が多いのに対し、夜臼式（江津湖式）段階になると、これらの遺跡が断絶し、低地部に新出する遺跡が増加する点を指摘している。上南部A遺跡と江津湖遺跡第9次調査の圧痕による穀物組成の差は、一見、「畑作物のみ」と「水田作物中心＋畑作物」のようにみえる。このことは丘陵地と低地という遺跡の立地とその生産基盤の違いと関連しているし、時期的な違いを強調すれば、先に金田（2009）が指摘した夜臼期における低地（水田稲作）への傾斜傾向と捉えることも可能である。ただし、これらに関しては他遺跡を含むさらなる資料の追加調査が必要であろう。

Ⅳ. 結 論

今回の圧痕調査で判明した確実な事実、熊本平野における刻目突帯文土器期には、栽培穀物としてイネ以外にアワとキビが組成する点である。これらの遺跡ごとの組成差が当該期における時間差なのか、遺跡立地の違いによる生業（生産形態）差なのかは今後さらなる調査が必要である。韓国では、

表3 九州地方における縄文時代～弥生時代早期の時期別植物種実資料（小畑2015を改変）

時期	北部・中九州 (宮地編年)	遺 跡 名	検出圧痕の種類													
			野生種 サシショウ属	在来栽培種 ダイズ属	在来栽培種 アズキ亜属	外来栽培種 シソ属(ゴマ)	外来栽培種 アサ	大陸系穀物					家屋害虫 コナゾウムシ			
縄文時代後期	阿高式	大矢 (熊本)														
		宮之迫 (鹿児島)	●					○				▲YMS 0001			●	
	坂の下式	柿原 (鹿児島)													●	
		南福寺式	出水貝塚 (鹿児島)													●
	出水式		田辺開拓第2 (宮崎)													●
		小池原下層式	内野々 (宮崎)	★		●										●
	横尾貝塚 (大分県)				●										●	
	横尾貝塚 (大分県)														●	
	友枝曾根 (福岡県)						●								●	
	鐘崎式	広原第1 (宮崎県)													●	
		北久根山式	南原内堀 (鹿児島)													●
	西平式		西平貝塚 (熊本)													●
			四箇 (福岡)													●
	太郎迫式	大野2・3区 (佐賀)														
		大野原 (長崎県)			●			●								●
	三万田式	三万田 (熊本)			●											●
		渡鹿貝塚 (熊本)														●
		中尾山馬渡 (宮崎)				●										●
		広原第一 (宮崎)														●
	鳥井原式	石の本 (熊本)										▲YMS 0003				●
		西平貝塚 (熊本)														●
	御領式	上南部 (熊本)			●											●
		御領貝塚 (熊本)					●									●
		江津湖9次 (熊本)														●
石の本 (熊本)															●	
天城式 (広田古)	上南部 (熊本)			●											●	
	重留1次 (福岡県)					●		▲SGT0359							●	
	上南部 (熊本)			●		●									●	
	石の本 (熊本)											▲YMS 0006			●	
古閑式古 (広田新)	ワクト石 (熊本)			●											●	
	木天向2次 (鹿児島)				●										●	
	筆無A (宮崎)	●						▲SGT 0879							●	
	重留1次 (福岡)														●	
古閑式新	塚ヶ段 (鹿児島)			●											●	
	上加世田 (鹿児島)	●													●	
	木天向1次 (鹿児島)										▲STM 0008				●	
	上南部 (熊本)														●	
黒川式古	石の本 (熊本)			●		●					▲YMS 0004				●	
	黒川式中	筆無B (宮崎)	●													●
		上加世田 (鹿児島)			●											●
		原田土楽B (福岡)			●											●
礪石原 (長崎)															●	
黒川式新	肥賀太郎 (長崎)			●							▲HGT 79222				●	
	権現脇 (長崎)			●											●	
	玉沢地区条里跡 (大分)						●								●	
	筆無A (宮崎)														●	
黒川式新～ 宮地Ⅰ期	正坂原 (宮崎)					●									●	
	石井入口 (大分)			●											●	
	干河原 (鹿児島)	●													●	
	王子原 (宮崎)														●	
宮地Ⅰb期～ Ⅱa期	石葛ヶ迫 (宮崎)														●	
	小迫 (鹿児島)				●										●	
	星原 (宮崎)														●	
	橋本一丁田4次SX121 (福岡)														●	
宮地Ⅱa期	扇田 (熊本)														●	
	江辻SX-01														●	
	橋本一丁田4次SX102 (福岡)														●	
	橋本一丁田4次SX116 (福岡)														●	
宮地Ⅱb期古	橋本一丁田4次SX125 (福岡)														●	
	菜畑9-12層 (佐賀)							★							●	
	東渡瀬1区 (佐賀)														●	
	曲9田住居址・11層 (福岡)														●	
宮地Ⅱb期新	権現脇 (長崎)														●	
	新屋敷2次 (熊本)														●	
	上南部A (熊本)						●								●	
	坂元B (宮崎)														●	
Ⅱb新期以降	上中段 (鹿児島)														●	
	橋本一丁田2次SD001-11層 (福岡)														●	
	橋本一丁田2次SD001-10層 (福岡)														●	
	橋本一丁田2次SD001-9層 (福岡)														●	
Ⅱb新期以降	山王 (熊本)														●	
	原山1号支石墓下葬 (長崎)														●	
	江津湖9次 (熊本)														●	
	黒土 (宮崎)						●								●	
Ⅱb新期以降	稲荷迫 (鹿児島)														●	
	橋本一丁田2次SD010 (福岡)														●	
	菜畑8上層 (佐賀)														●	
	市ノ原 (鹿児島)														●	
Ⅱb新期以降	那珂37次SD02-2区埋土 (福岡)														●	
	橋本一丁田2次SK087 (福岡)														●	
	玉沢地区条里跡 (大分)														●	
	那珂67次SU24 (福岡)														●	
Ⅱb新期以降	那珂67次SU29 (福岡)														●	
	那珂67次SD08下層 (福岡)														●	
															●	
															●	

※表中▲は植物学的・考古学的要件を満たしていない圧痕資料（不確実資料）

●は圧痕資料、★は炭化物

黒川式土器～刻目突帯文期並行期である無文土器前期よりイネ・アワ・キビに加え、オオムギやコムギが伴っている（小畑2010）。佐賀県唐津市曲田遺跡では刻目突帯文期にオオムギ類片が1点検出されている。よって、九州地域の刻目突帯文期にもオオムギやコムギが栽培穀物として含まれていた可能性もまったくなかった訳ではない。圧痕として出現しないのは、絶対量が少なかったことと、土器作りの季節とムギ類の収穫時期が異なっていたことなどが原因であったと考えられる。

また、今回の調査と既存の成果を参考にすると、おおよその傾向として、刻目突帯文期以前の大陸系穀物の伝播時期が縄文時代後期まで遡る可能性はほぼないことが追認できた（小畑2015）。その出現時期について鍵を握るのは、出現期突帯文期（宮地編年Ⅰ期）（宮地2008）と干河原段階（東2002・2009）である。出現期突帯文土器期の後半である宮地編年Ⅰb期の基準資料である福岡県粕屋郡江辻遺跡からは江辻SX-01段階のアワが出土したとの報告がある（中沢2016）。中沢はこの段階からイネ・アワ・キビのセットが存在した可能性を指摘している（中沢2016・2017）。しかし、当該期の遺跡は本地域ではきわめて少ない。いずれにせよ、今後は、それらとほぼ並行期か先行時期と考えられる黒川新段階の資料を今後悉皆的に圧痕調査する必要があるだろう。

謝 辞

土器圧痕調査にあたり、熊本市立博物館学芸員（当時）美濃口紀子氏、熊本市文化財課埋蔵文化財係専門職（当時）網田龍生氏、岩谷史記氏、金田清一氏にお世話になった。心より感謝申し上げます。

本研究は小畑が研究代表者を務めている平成29年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究A「軟X線・X線CTを用いた栽培植物・家屋害虫のタフオノミーと縄文人の心象の解明」（研究課題番号16H01957）の研究成果の一部である。

<引用・参考文献>

- 小畑弘己 2008「古民族植物学からみた縄文時代の栽培植物とその起源」『極東先史古代の穀物3』、日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金（基盤研究B-2）（課題番号16320110）「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書、43～93頁、熊本大学
- 小畑弘己 2010「近年の朝鮮半島における古民族植物学」『季刊考古学』113、101～104頁、雄山閣出版
- 小畑弘己 2015「植物考古学からみた九州縄文晩期農耕論の課題」『第25回九州縄文研究会研究発表要旨集』、8～17頁、九州縄文研究会
- 小畑弘己 2016「九州各地の種実出土状況（4．熊本県）」『第11回九州古代種子研究会発表資料集』、1～8頁、九州古代種子研究会
- 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 2007「土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』15-2、97～114頁、日本植生史学会
- 金田精一 2009「熊本平野における弥生文化受容期の様相」『古代文化』61-2、古代学協会、116～126頁
- 川上勇輝 1958「米の圧痕をもつ縄文末期の土器」『熊本史学』14、36～37頁、熊本史学会
- 熊本市教育委員会 1979『昭和53年度 熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 熊本市教育委員会 2004『扇田遺跡―第1次調査区発掘調査報告書―』

- 熊本市教育委員会 2005『江津湖遺跡群Ⅰ』
- 熊本市教育委員会 2008『山王遺跡—山王遺跡第1次調査区発掘調査報告書』
- 熊本県教育委員会 1952『古閑原貝塚調査抄報』、熊本県文化財調査報告書第6集
- 熊本県教育委員会 2002『石の本遺跡群Ⅴ』、熊本県文化財調査報告第205集
- 小谷凱宣 1972「縄文時代晩期の植物利用の研究—上ノ原遺跡の植物性遺物について」『民俗学研究』、36-4、312-313頁、日本民族学会
- 中沢道彦 2016「長野県域における縄文時代終末の初期農耕導入について」『長野県考古学会誌』151、9-23頁、長野県考古学会
- 中沢道彦 2017「日本列島における農耕の伝播と定着」『季刊考古学』138、26-29頁、雄山閣出版
- 中沢道彦・丑野毅 2005「レプリカ法による熊本県ワクド石遺跡出土の種子状圧痕の観察」『肥後考古』13、24-37頁、肥後考古学会
- 西健一郎 1983「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討（一）」『九州文化史研究所紀要』28、137-175頁
- 西健一郎 1985「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討（二）」『九州文化史研究所紀要』30、205-237頁
- 比佐陽一郎・片多雅樹 2005『土器圧痕レプリカ法による転写作業の手引き』、福岡市埋蔵文化財センター
- 宮本一夫 2005「園耕と縄文農耕」『韓・日 新石器時代の農耕問題』、111-130頁、(財)慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会
- 宮本一夫 2009『農耕の起源を探る—イネの来た道—』、歴史文化ライブラリー276、254頁、吉川弘文館
- 宮地聡一郎 2008「凸帯文系土器（九州地方）」『総覧縄文土器』、806-813頁、アムプロポーション
- 山崎純男 2005「西日本縄文農耕論」『韓・日新石器時代の農耕問題』、33-55頁、慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会